2版

様　式　C－19、F－19－1、Z－19　(共通)

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 29 年　6 月　8 日現在

機関番号：32304
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：24730469

研究課題名（和文）ドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェの地域史研究：特殊教育との人的連続性

研究課題名（英文）Research on the Local History of the "Lebenshilfe": A Focus on the Personal Continuity between "Lebenshilfe" and the Special Educational System

研究代表者
高柳　瑞穂（松本瑞穂）（TAKAYANAGI, Mizuho）

東京福祉大学・社会福祉学部・講師

研究者番号：60588010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：1958年に設立されたドイツ知的障害親の会レーベンスヒルフェ（以下レーベンスヒルフェと略す）の創設史及び展開過程を、その組織構造及びそれに付随する特殊教育界との関わりを軸として考察した。レーベンスヒルフェが組織機構を整える際、真っ先に整備したのは「親委員会」ではなく「研究者委員会」「専門職委員会」であり、これが結果的にレーベンスヒルフェの諸活動におけるインテグレーションの立ち遅れにつながった可能性がある。また、1970年代の、知的障害児者強制断種への賛成表明に代表されるような「保守化」傾向の一因になった可能性が指摘された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the history of the foundation and the activities of the “Lebenshilfe,” the German “parental” association for people with mental disability, from the perspective of its organizational structure and its relationship with the special education system in Germany. Lebenshilfe set up the “Research Council” and “Professionals Council” prior to setting up the “Parental Council.” This proved to be a hindrance to the integrative policies of Lebenshilfe. It also made Lebenshilfe become more conservative in the 1970s, as is evident from its approval of sterilization programs for people with mental disability.

研究分野：社会福祉

キーワード：社会福祉史　障害福祉　特殊教育

１．研究開始当初の背景

筆者は長らく、ドイツ知的障害‘親の会’レーベンスヒルフェ（以下、レーベンスヒルフェと略す）の成立と活動の歴史に関心を持ち、研究してきた。関心を持ったきっかけは、その創設史にある。障害児の母親がイニシアチブを取ったとされるイギリスやアメリカ、日本の知的障害児の親の会とは異なり、レーベンスヒルフェは「障害児の親ではない、オランダ人男性トム・ムッタース（Tom Mutters 1917-）が、戦後ドイツの難民の子どもたちの生活を目の当たりにし、義憤にかられて組織した親の会」と言われていた。また、先行研究においては「古く権威主義的な戦後ドイツの特殊教育制度に立ち向かい、一石を投じた親の会」とされ、「ノーマライゼーションの担い手」と描かれることも多い（s. Mühl [1984]1994, Möckel [1988]2007, Hensle/Vernooij [1979]2002）。

しかし、筆者の当該科研以前の研究（2010-2011年度科研費補助金22830070を含む）で、次のことが判明している。レーベンスヒルフェがその組織機構を整える際、真っ先に整備したのは、「親委員会」ではなく「研究者委員会」であり、これは学識者を中心とする委員会であった。また、レーベンスヒルフェ草創期の理事や研究者委員会のメンバーは、マールブルク大学特殊学校教員養成課程の立役者や医学部教授らで占められていた。通説とは異なり、レーベンスヒルフェは最初から国内向きの組織であり、また特殊教育界とかなりの程度親和的であった。実際、1950年代から60年代にかけて、レーベンスヒルフェ傘下の特殊学校数や特殊幼稚園の数は飛躍的に上昇し、ドイツ特殊教育黄金期のセグリゲーション施策を、側面から支持する形となった。

ここより、新たに以下の疑問が浮上した。医学か／教育学かの二項対立や、ドイツの知的障害教育史の先行研究上、強固に存在する施設史／学校史という腑分けでは、レーベンスヒルフェの草創期の全容は必ずしも捉えきれないのではないか。戦前から戦後にかけての福祉領域の主導権の人的推移に着目し、そこにレーベンスヒルフェがどう位置づくのかを考察すべきではないか。

ここより筆者は、当該研究計画に着手するに至った。当該科研費研究の具体的な目的については、あらためて以下に記す。

２．研究の目的

本研究は、レーベンスヒルフェの成立史と組織機構変遷を軸とし、レーベンスヒルフェと特殊教育制度の関係を、主に人的連続性に着目して考察するとともに、ドイツ障害福祉・教育の特異性――即ち、タコつぼ的な障害種別に細分化された学校制度、それを正当化する特殊教育学、施設拡充策によるセグリゲーション――が、如何に成立し、補強されてきたのかを歴史的に考察するための素材を提供することを目的とする。なお、主たる問題関心及びテーマは前回の科研費研究（課題番号22830070）に連続している。

３．研究の方法

現地調査を以下の日程で実施した。日程とともに、調査場所、実施内容等も簡単に記す。

＜第１回＞2012年8月29日から2012年9月3日　調査地：ベルリン、マールブルク

当調査では創設史に関するデータはあまり集まらなかった。主に、ナチの過去を抱えるドイツ福祉団体の、歴史研究者に対する警戒心が原因であるが、それでも、今回の調査でわかったことを簡潔に記す。

レーベンスヒルフェ・ベルリンが運営するインテグレーション保育所、iKitaを視察した。「インテグレーション」教育というと、日本の文脈では一般的に「障害児とそうでない子ども」の統合教育が連想されるが、ここでのインテグレーションの対象はもっぱら外国人（移民）であった。トルコ系が圧倒的に多く、子ども向けのみならず、移民の母親向けのドイツ語教育など、多様なプログラムが準備されていた。

なお、当所長に財政面についてヒアリングしたところ、「設置・運営資金はほとんど国からの補助金である」との説明があった。これは、それまでの調査では不明な部分であった。レーベンスヒルフェ中央本部は「主な運営資金は寄付金である」と主張する。しかし、寄付者のリストや収支表が非公表であるなど、不明瞭な点も多かった。中央本部を離れてベルリンという地域でヒアリングしたことで、より実態に近い情報が得られたように思う。ただし、中央本部の意図として、スティグマの回避のためにあえて戦略的に「寄付金で運営」と強調している可能性もあり、評価は慎重に行いたいと考える。

＜第２回＞2015年9月13日から2015年9月21日　調査地：ベルリン

ベルリンでレーベンスヒルフェに関する文献調査を実施した。訪問地はドイツ社会問題研究所の福祉図書館、ペスタロッチ・フレーベル館内にあるアリス・ザロモン・アーカイヴ、および国立図書館ベルリン館である。ドイツ社会問題研究所（DZI）は、福祉に関するドイツ語のすべての文献を収集し利用可能にするというプロジェクトを遂行中であり、その福祉図書館は充実している。日本の国立国会図書館とは異なり、ドイツの国立図書館はドイツ国内のすべての出版物を所蔵しているわけではないため、DZIでしか入手できない貴重な文献が多い。

＜第３回＞2016年7月24日から2016年8月11日　調査地：ロンドン

レーベンスヒルフェの1958年の設立際し、大きな影響を与えたと言われるイギリスの

Mencap（正式名称 The Royal Mencap Society）を調査した。
　レーベンスヒルフェの創設時の重要なエピソードの一つに、後に理事となる主要な人物たちがイギリスを訪問し、ジョージ・リー氏と会ったということがあげられる。
　ジョージ・リー氏は、1957 年から 1980 年まで Mencap の事務局長を勤めた人物で、ナチ支配下のドイツ、オーストリア、チェコ=スロヴァキアからユダヤ人の子どもを救出する「キンダー・トランスポート」で有力な役割を担ったクェーカー教徒でもあった。戦後は「セイブ・ザ・チルドレン基金」に携わりギリシアで活動し、英国リハビリテーション協会（British Council for Rehabilitation）を経て Mencap 事務局長に就任した。
　なお、当初の研究計画で予定していたアーカイヴ調査は実施できず、レーベンスヒルフェへの具体的な影響は依然として不明である。Mencap の Research Team からは「歴史資料は存在すると思うがアクセス可能な形に整えられていない」という回答があった。他団体や博物館等を紹介され、問い合わせたがいずれも回答は得られなかった。戦前から戦中にかけて、英国政府はユダヤ人難民の受け入れに最も非協力的であったと言われる（本間 1990: p.64)。筆者の主眼はナチズムではないが、それでも、歴史研究者に対する警戒心を呼び起こしてしまったかもしれない。イギリスの知的障害関連の親の会に関する本格的な歴史研究が英語圏でも極めて少ない理由の一端は、ここにあるのかもしれない。

４．研究成果

　すでに述べたとおり、歴史研究者への警戒心、筆者の能力不足等により、当初の計画どおりに研究を遂行することは困難であった。それでも、明らかになったことを以下にまとめる。

(1)レーベンスヒルフェ内「研究者委員会」と「専門職委員会」の役割

　当該科研より前には仮説的提示にとどまっていたいくつかのことが裏付けられた。特に医学部教授などの学識者で固められた研究者委員会の役割が明確になった。レーベンスヒルフェでは、1958 年の創設当初から研究者委員会が任命さてれており、同委員会には、「学術的な諸団体と結びつき、社会的な問題提起を通して制度や施設を構築していく」という使命が課されていた。ごく一般的な家庭の、知的障害児の親たちではなく学識者が中心となって組織機構を整備していくことには一定のメリットがあった。学識者たちは自らの抱負や人脈を生かし、会議やシンポジウムのための場所を提供し、急速に組織機構を整えていく。1968 年には全国組織化を達成する。
　しかし、研究者委員会の活動もまた、レーベンスヒルフェの専門職志向および施設志向を推進し、強化していく要因の一つにもなった。既に述べた通り、創設時の「学識者」の中には、マールブルク大学の特殊学校教員養成課程の中心人物や医学部教授らがいた。彼らは「親委員会」を整備するより先に「専門職委員会」を立ち上げ、専門職からのコミットを深くしていった。それにより、レーベンスヒルフェの運営する特殊幼稚園、作業所、特殊学校などは 1950 年代から 1960 年代にかけて急増する。
　これが結果として、1980 年前後より起こるインテグレーションへのシフトチェンジの妨げになったのである。実際、地域レベルの母親会員の中からインテグレーション幼稚園や小学校を望む声はあったが、「レーベンスヒルフェの理事たちに専門職、すなわち特殊学校教員がいたため、実現しなかった」との証言を得ている。「理事たちはインテグレーションが進展すると、自らの働く場所がおびやかされるのではないかと懸念していた」のである。

(2)知的障害児者への強制断種手術

　1972 年、SPD／FDP 連立政権は、刑法（StGB）§226（重度身体損傷）の改正案を作成した。草案によれば、断種は最低でも 26 歳以上でないと実施してはならず、もちろん本人の承諾も必要である。草案は実現しなかったが、この草案に反対したのが、レーベンスヒルフェと、ドイツ民間福祉頂上 6 団体の一つであるディアコニー事業団である。
　1975 年にはレーベンスヒルフェは、精神薄弱者に対する（強制）断種を有効にする法律に対して明確に賛成を表明した。たしかに当時の風潮として、望まない妊娠や中絶などで負う心身のダメージを減らしたいという親の希望は存在していた。しかしながら、研究者や専門職が中心となって国際情報を積極的に取り入れ、「精神薄弱」に代わり「知的障害」の用語を提唱するなど、先駆的な試みを数多く実施していたレーベンスヒルフェがこれほど保守化した要因は何だったのだろうか。

(3)総括と今後の展望

　すでに述べたような事情から、当初の研究計画とは異なり地域史研究やアメリカのアーカイヴ調査は行えなかったが、それでも、前回科研（22830070）及び今回の科研研究から判明したことは多い。
　なお、今後着手する課題は、(1)(2)に関連して以下の 2 点になる見通しである。
　①1970 年代のレーベンスヒルフェの理事ら中心メンバー（創設者ムッタースも含む）の意図を探り、知的障害児者への強制断種へ賛成するに至った経緯を分析する。
　②これまでの成果及び①の結果をふまえて、レーベンスヒルフェの「研究者・専

門職主導」の組織づくりのメリット、デメリットを正確に評価する。

なお、これまでに得た知見を論文等にまとめる作業に専念したいため、今年度からの新規科研費申請は行わなかったが、①②の作業計画次第で、来年度以降に申請する可能性もある。

末筆ながら、科研費という形で現地調査の可能性を与えていただいたことに、あらためて感謝申し上げたい。当初の計画とは異なるものの、これまで述べてきたような内容はすべて既存の先行研究（ドイツ語圏でさえも）で空白となっている箇所であり、貴重な知見が得られた。今後も、知的障害児者の福祉領域でどのような取り組みが行われてきたのか、歴史的に調査していきたい。また、学識者や専門職も、最初から自らの権力や保身に関心があったわけではなく、立ち上げ時には高い理想や信念を持っていた。しかし組織が肥大化するにつれ、結果的にとはいえ、知的障害児者及びその家族は、学識者や専門職の利害や、既存の制度との狭間に置かれることになった。そうした彼らのニーズにも引き続き光を当てていきたいと考える。

＜文献リスト（主要なもののみ）＞

〔ドイツ語・英語文献〕

Boeßenecker , Karl-Heinz (2005[1995]): Spitzenverbände der Freien Wohlfahrtspflege in der BRD. Münster, 3. Aufl. Votum Verlag.

Castell, Rolf/ Nedoschill, Jan/ Rupps, Madeleine/ Bussiek, Dagmar (2003): Geschichte der Kinder- und Jugendpsychiatrie in Deutschland in den Jahren 1937 bis 1961. 1. Aufl. Göttingen. Vandenhoeck und Ruprecht.

Ellger-Rüttgardt, Sieglind ([1997]2006): Geschichte der sonderpädagogischen Institutionen. IN: Harney, Klaus/ Krüger, Heinz-Hermann (Hrsg.) ([1997]2006): Einführung in die Geschichte von Erziehungswissenschaft und Erziehungswirklichkeit. 3. Aufl. Opladen, Bloomfield Hills: Verlag Barbara Budrich.

Ellger-Rüttgardt, Sieglind (2008): Geschichte der Sonderpädagogik. 1. Aufl. München: Ernst Reinhardt, GmbH & Co KG, Verlag.

Fröhlich, Andreas(2000): Entstehung der Sonderschulen für Geistigbehinderte. Entwicklung in Rheinland-Pfalz in 1949-1980. 1. Aufl. Bad Kreuznach.

Häßler, Günther/ Häßler, Frank(2005): Geistig Behinderte im Spiegel der Zeit. 1. Aufl. Georg Thieme.

Hensle, Ulrich/ Vernooij, Monika, A. ([1979]2002): Einführung in die Arbeit mit behinderten Menschen 1. Psychologische, pädagogische und medizinische Aspekte. 7. korrigierte Aufl. Wiebelsheim: Quelle & Meyer.

Köbsell, Swantje (1987): Zwangssterilisation geistig behinderter Frauen. 1. Aufl. München. AG-SPAK-Publ.

Möckel, Andreas ([1988]2007): Geschichte der Heilpädagogik. 2. völlig überarbeitete Neuaufl. Stuttgart: Clett Cotta Verlag.

Mühl, Heinz ([1984]1994): Einführung in die Geistigbehindertenpädagogik. 3.Aufl. Stuttgart, Berlin, Köln: W. Kohlhammer.

Thümmel, Ingeborg(2003): Sozial- und Ideegeschichte der Schule für Geistigbehiderte im 20. Jahrhunderts. Zentrale Entwicklungslinien zwischen Ausgrenzung und Partizipation. 1. Aufl. Weinheim, Basel, Berlin. Beltz Verlag.

〔日本語文献〕

松本瑞穂（2006）「ドイツ知的障害親の会"Lebenshilfe"の創設と展開――難民／発達障害／オランダ人 Tom Mutters の役割」東京都立大学修士学位論文.

松本瑞穂（2008）「ドイツ知的障害親の会"Lebenshilfe"成立前史――Tom Mutters だけが創設の担い手であったのか」『社会福祉学』48 巻 4 号, pp.92-103.

松本瑞穂（2011）「ドイツ知的障害‘親の会’レーベンスヒルフェの成立史研究」首都大学東京博士学位論文.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

髙柳瑞穂（2017）『ドイツ知的障害児者強制断種問題とレーベンスヒルフェ――1970 年代の議論を中心として』環境福祉学会学会誌（投稿準備中）

６．研究組織

(1)研究代表者

髙柳　瑞穂（TAKAYANAGI, Mizuho）
東京福祉大学・社会福祉学部・専任講師
研究者番号：24730469

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし